誕生の日

hirokatsu_k

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
誕生の日

【Ｎコード】
Ｎ２２７０Ｊ

【作者名】
ｈｉｒｏｋａｔｓｕ_ｋ

【あらすじ】
師走ー。
妊娠６ヶ月の私は、突然激しいめまいに襲われた。
意識を失い救急車で運ばれた私は、病院のベッドで目を覚ました。
そして気付いた時、私のお腹には６ヶ月間育ててきた命が無い事に気付いた。

我が子？

１２月・・・。
私がこの小さな田舎に嫁いできてから1年が経った。

私のお腹には6ヶ月になる命が宿っていた。
初めての子供。初めての出産。
そして、慣れない土地での生活であったが、主人や養母が色々と手伝ってくれるので、とても心強かった。

ただ、最近よくめまいを起こした。

念の為病院で検査を受けたが、何も異常はないと診断された。
鉄分が足りないのかも知れないと思い、いつもより多めに摂取するよう
心がけた。

時間はあっという間に過ぎ、日付は１２月３０日になっていた。
時間が経つのは早いなと思いながらも、大掃除など、やるべき事は既に終わらせた。

３が日まではゆっくりできるかな―。

そう思った矢先、私をめまいが襲った。

いつものめまいなら少し休めば良くなる―。

しかし、横になっていても楽にはならず、
むしろ、悪化しているように感じた。

1時間が経つ頃、買出しに出ていた主人が戻ってきた。
主人は私の異変に気付き声をかけてくれた。

大丈夫―。

しかし、その言葉は声にならなかった。
もう一度声を出そうとするが、出ない。

おかしい―。

そう思って体を起こそうとしたが、起き上がる事もできなかった。

私の異変に気付いた主人が、急いで救急車を呼んだ。
私は救急車に乗せられる直前に、意識を失った。

意識を取り戻した時、私は病院のベッドに寝かされていた。
頭がぼんやりとしていて、何が起きているのかすぐに理解はできなかった。

ふと傍を見ると、主人が青い顔で座っていた。
私が意識を取り戻したことに気付くと、安堵の表情を浮かべた。

けれど、すぐ主人は顔を伏せてしまった。

ふと、自分の身体の違和感を感じた。
その違和感を辿っていくと、それは腹部にある事に気が付いた。

この６ヶ月間、育ててきた命がそこに無かったのだ。

すぐさま主人が私に声をかけた。

―落ち着いて聞いて欲しい。

実はお腹の子供は今、保育器に入れられているんだ。―

どういうことかわからず、混乱する私に主人はゆっくりと話を続けた。

私が意識を失い、病院に運ばれた時には母子ともに危険な状態で、私は丸一日意識が戻らなかったと言う。

そこでお医者さんが提案したのは帝王切開でお腹の子供を取り出すという方法であった。

この方法であれば少なくとも母体は助けられると説明された。

そこで主人は悩んだ末に、手術に踏み切る決断をしたらしい。

申し訳なさそうに、主人は私に頭を下げた。

しかし子供が生きているという事は、私にとって救いであった。

一刻も早く子供に会いたい。

けれど、私の身体はすぐに動かす事は出来なかった。

３日後、私はお医者さんの許可を得て、自分の子供のところへ向かった。

保育器に入れられたその子の姿は、私の心を締め詰めた。

肌は青紫色、身体も小さく自分の両手に収まる程の大きさしかな

かった。
自身で呼吸は出来ず、呼吸器を使ってかろうじて呼吸をしていた。

私の目に、涙が溢れた。
この子が何をしたというのか。
この子はどうなってしまうのか。

何故ちゃんと育ててあげられなかったのか。
何故ちゃんと産んであげられなかったのか。

涙は、私から視界を奪っていった。

宣告（前書き）

お医者さんのはややあって、重々しく口を開いた。
その言葉を聞いた瞬間、私の頭の中は真っ白になった。

宣告

私と主人はお医者さんに呼び出された。

どんな宣告を受けるのか―。

私の心は不安と絶望でいっぱいになっていた。

その時、主人が私の手を握ってくれた。そして何度も励ましてくれた。

主人も不安なのだ。繋いだ手の指先が震えている。

それでも主人の声は力強く、幾許か不安を和らげてくれた。

私たちの方へ向いたお医者さんは、大変申し上げにくいのですが、と

仰り、言葉を詰まらせた。

ややあって、お医者さんは重々しく口を開いた。

―お子さんの容態なんですが、非常に危険な状態です。

産まれてから体重が減り続けています。

恐らく、2ヶ月と保たないかもしれません。―

その言葉を聞いた瞬間、私の頭の中は真っ白になった。

夢であって欲しい、そう思いながら目には涙が溢れてきた。

何とかならないのか、主人は必死で問いかけるがお医者さんは静かに

首を横に振った。

―最善は尽くします。しかし、覚悟はしておいてください。―

私達は絶望に打ちひしがれながら、その場を後にするしかなかった。

私は再び我が子の下に向かった。

たった2ヶ月・・・。この子の一生はたった2ヶ月で終わってしまう。

小さな箱の中で、懸命に生きようとしている。

精一杯呼吸をして、僅かながら手足を動かしている。

この子にとっては、この一瞬ですら貴重な時間。

私にできるのは、その一瞬を目に焼き付ける事。

けれどその思いとは裏腹に、涙で視界が霞んでいった。

程なく、主人から連絡を受けた養母が病院に駆けつけた。

養母は、せめてこの子が生きた証として立派な葬儀をあげよう。

この子をちゃんと送り出してあげようと言った。

養母の言葉は聞く人によっては冷たく聞こえるかもしれない。

しかし、養母も目から涙が溢れていた。

私は養母にしがみつき、声を出して泣いた。

希望

主人と養母に連れられて病室に戻った私は、身体中の力が抜けたように
ベッドに座り込んだ。

主人も養母も無言のまま病室に座っていた。

養母の言うように、あの子のために立派なお葬式をあげてあげる事が
一番なのだろうか。

私の心の中には、もう絶望しかなかった。
この子はもう助からない、そんな気持ちがずっと渦巻いていた。

その時、養父が病室に入ってきた。

―あの子を別の病院に移すぞ。準備をしなさい！―

養父の言葉に私たちは驚いた。
主人が養父にどういう事か、と聞くと、

―知り合いの紹介で国立の小児病院に入れるように手配してもらった。
あそこなら、あの子を助けられるかもしれない。―

そう言って養父はお医者さんのところへ向かった。
主人もその勢いにつられ、養父の後を追った。

私も一緒に飛び出したい衝動にかられたが、養母に止められ、
そのまま病室に残った。

それからの時間はとても長く感じられた。
時計の秒針が1秒を刻むのも、とても長く感じた。

３０分程経った頃、養父と主人がお医者さんと一緒に私の病室に訪れた。

転院に際しての注意事項などを確認した後、お医者さんが手配してくれた
緊急車両で国立小児病院へと移動した。

移動の最中、私はか細く呼吸をする我が子をただ見つめるしかできなかった。
この子を見つめながら泣く事しかできなかった。

国立病院に到着すると同時に、緊急の手術が行われた。
我が子は自分の力で血液を作る事ができない状態だと説明された。
その為、新しい血液を輸血する手術が必要だった。

あの子がこの手術室に入って、どれだけの時間が経っただろう。
手術室からお医者さんが出てきた。

―血液が足りません。どなたかＯ型の血液を提供していただけませんか。―

すぐにでも血液を提供したかった。

必要な分だけ、使って欲しい。

しかし、私も主人も、養父や養母も全員A型だったのだ。

何故あの子に何もしてあげられないのだろう。

どうしてあの子の力になってあげられないのだろう。

私は再び絶望に襲われた。

その時、主人が私に声をかけた。

―誰かO型の人を捜そう！―

そう言って主人は外に向かっていった。

私と養父、養母もそれに続いた。

外に出て、私たちは必死で血液提供を呼びかけた。

しかし、なかなか血液を提供してくれる人はいなかった。

その時、一人の男性が私たちに声をかけてきた。

―あの、私で良ければ協力します。―

私も主人も、その人に頭を下げた。

これであの子は助かる。

私たちの胸に希望が見え始めた。

我が子？

血液の提供を申し出てくれたのは、この近くの自衛隊基地に勤めている
自衛隊員の方だった。

できるだけ大量の血液が必要だと聞いたその人は、すぐに基地へ連絡して
Ｏ型の人を集めてくれた。

しかし、血液の問題は解決したものの、我が子の容態は依然として予断を
許さなかった。
体重は未だ９００ｇ、本来の新生児の体重には程遠い状態だった。

２，３日に一度、この子の心臓が止まる事もあった。
その度にお医者さんが心臓マッサージを行った。
強い衝撃を与えなければならないマッサージに、この小さな身体が
耐えられるのか、この小さな身体にかかる負担を考えると、私は
自責の念に
かられた。

眠れない日が続き、私自身も疲れが溜まっていった。

転院してから1ヶ月が経った頃、あの子の身体に異変が起こった。
心臓が止まり、マッサージを行う。
息を吹き返しても、また数分から数十分でまた心臓が止まる。

それを何度も何度も繰り返した。

この子はもう駄目かもしれない、私はそう思ってしまった。
それは私だけでは無く、一緒に居た家族みんながそう思ってしまった。

何時間も経った頃、あの子の容態は落ち着きを取り戻した。

そして私たち家族は、お医者さんに呼び出された。

―落ち着いて聞いてください。
お子さんの容態は極めて危険な状態です。
いつまた心臓が止まってもおかしくありません。―

その宣告は、私たちの絶望をより確定させたような一言だった。
けれど、もう涙は出なかった。
きっと心のどこかでそれを想像していたからだろう。

あの子の苦痛をこれ以上見ていたくない。
早く楽になって欲しい。私はいつの間にかそう思うようになっていた。

そんな私に、お医者さんはこう言った。

―ただし、お子さんはまだ”生きる”事を諦めていません。
小さな身体で精一杯生きようとしています。
痛くても、辛くても、必死で生きようとしています。
だから、ご家族の方も諦めないで下さい。―

その言葉に、私の目から涙が溢れた。
あの子は一生懸命生きようとしている。
まだ諦めていないんだ。

なのに私は諦めてしまっていた。
あの子を信じてあげられなかった。
ごめんね、本当に。
お母さんを許してね。

そう思うと、私の涙は止まらなかった。

その時、看護師さんが飛び込んできた。
また容態が急変したのだ。
私たちは急いで我が子の下へ向かった。
お医者さんが再び心臓マッサージを行う。
私は心の中で頑張ってほしいと願った。

その時―。

あの子は信じられないくらい大きい声で泣き始めた。
こんな小さな身体全部を使って、この子は大きな声で泣いた。
それは私の心の声に応えたように聞こえた。

それから3ヶ月が経った。
あの日からあの子の容態は安定した。

みるみるうちに体重も増え、２８００ｇにまで成長した。

生まれて４ヶ月、お医者さんの許可を得てこの子は我が家に迎えられた。

お医者さんは退院の際に奇跡だと言った。

でも私はこう思う。

私はこの子が産まれてから、きっと生きてくれると信じていなかった。

だけどあの時、私はこの子に生きて欲しいと願った。

きっと生きてくれると信じた。

だからこの子はそれに応えてくれたのだと。

あれから２５年―。

小さかった我が子は、立派に成長してくれた。

そして今、私と同じ「親」になろうとしている。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2270j/

誕生の日

2010年10月8日22時31分発行